

線型空間 その 4

4.3 線形空間の基底

4.4 1 次独立性と行列式

4.5 計量線形空間

4.6 グラムシュミットの直交化

前回：

1 次独立性と行列式

用語：

- 基底，線形結合 = 一次結合，
- 一次独立（線形独立），一次従属（線形従属），線形空間の次元
- 行列の次元，階数（ランク），前期：行列式

4.4 1 次独立性と行列式

4.4 1 次独立性

- 線形独立（一次独立）
どのベクトルも他のベクトルの線形結合で表せないならば，ベクトルの組 $\{v_1, v_2, \dots, v_r\}$ は線形独立（一次独立）であるという．
- 線形従属（一次従属）
どれか一つのベクトルが他のベクトルの線形結合で表せる．

例題 4.5 は重要．例題 4.6 (2) は知らない解けない．

$$k_1 \mathbf{a}_1 + k_2 \mathbf{a}_2 + k_3 \mathbf{a}_3 + \dots + k_n \mathbf{a}_n = \mathbf{0}$$

$$\begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 & \mathbf{a}_2 & \dots & \mathbf{a}_n \end{bmatrix} \begin{bmatrix} k_1 \\ k_2 \\ \dots \\ k_n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \dots \\ 0 \end{bmatrix}$$

$$A\mathbf{k} = \mathbf{0}$$

行列 A の列空間： A の列ベクトル v_1, v_2, v_3 によって張られる空間．

$$\begin{bmatrix} v_1 & v_2 & v_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 5 & 3 \\ -2 & 6 & 2 \\ 3 & -1 & 1 \end{bmatrix}$$

行列 A の列空間の次元（＝行空間の次元）を A の階数（Rank）という．

ランク (階数)

m 本の n 次元ベクトル v_1, v_2, \dots, v_m を列とする $n \times m$ 行列を $A = (v_1, v_2, \dots, v_m)$ と書く. v_1, v_2, \dots, v_m のうち, 線形独立なもの個数を行列 A のランク (または階数) と呼ぶ.

$n \times n$ 行列 A に関する次の条件はすべて同値

- (a) A のランクが n である.
- (b) 行列式 $|A|$ が 0 でない. $|A| \neq 0$.
- (c) 逆行列 A^{-1} が存在する.

問:

次の条件を満たす線形従属な 4 次元ベクトル 4 本を例示せよ, それらをどう作成したか, 説明せよ.

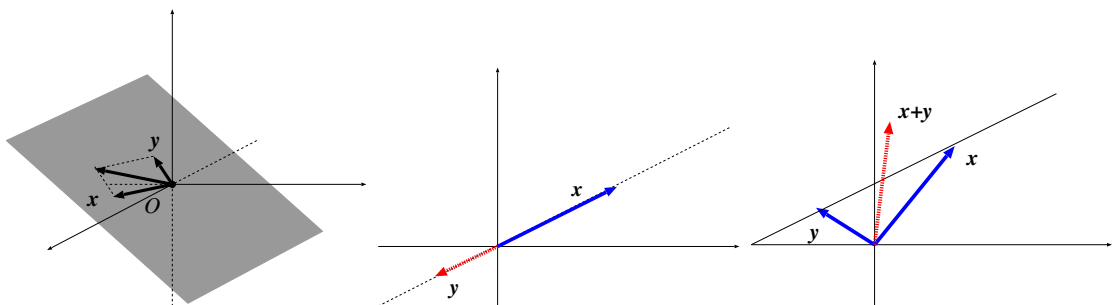
- それらが張る空間の次元が 3.
- それらが張る空間の次元が 2
- それらが張る空間の次元が 1.
- それらが張る空間の次元が 0.

$k_1 e_1 + k_2 e_2 + k_3 e_3 + k_4 e_4 = \mathbf{0}$ として, k_1, k_2, \dots を書け.

4.3 線形空間の基底

定義

線形空間 V のベクトル e_1, e_2, \dots, e_n を用いて, V の任意のベクトルを 1 次結合として表すことができるとき, ベクトル e_1, e_2, \dots, e_r は線形空間 V を張るといふ.



「 x, y の張る空間」

片方を, もう一方 (残りのベクトル) の線形結合で書ける. x と y は線形従属.
片方を, もう一方 (残りのベクトル) の線形結合で書けない. x と y は線形従属.

定義 4.4 (p.87) によると, 線形独立でない基底ベクトルとは, 呼べない.

例題 4.4. 例題 4.1 (1) の線形空間 V_1 に対して基底を一組求め, V_1 の次元を求めよ.

定義：線形空間 \mathcal{V} の次元 (p.87)

線形空間 \mathcal{V} の基底を構成する元の個数 n . $\dim \mathcal{V} = n$ と表す .

連立1次方程式

$$\begin{cases} x + 2y + 3z + 4w = 0 & \cdots \textcircled{1} \\ 3x + y + 2z + w = 0 & \cdots \textcircled{2} \end{cases}$$

$\textcircled{2} \rightarrow \textcircled{2} - \textcircled{1} \times 3$

$$\begin{cases} x + 2y + 3z + 4w = 0 & \cdots \textcircled{1} \\ 0x - 5y - 7z - 11w = 0 & \cdots \textcircled{2} \end{cases}$$

もうこれ以上進めない . 仕方がないので , $z = s, w = t$ とおくと , $y = -(7s + 11t)/5$

$\textcircled{1} \rightarrow \textcircled{1} + \textcircled{2} \times 2/5$

$$\begin{cases} x + 0y + (-14/5 + 3)z + (-22/5 + 4)w = 0 & \cdots \textcircled{1} \\ 0x - 5y - 7z - 11w = 0 & \cdots \textcircled{2} \end{cases}$$

$$\begin{cases} x + 0y + \frac{1}{5}z - \frac{2}{5}w = 0 & \cdots \textcircled{1} \\ 0x - 5y - 7z - 11w = 0 & \cdots \textcircled{2} \end{cases}$$

未知変数の数 4 . 式の数 2 . 2 つ式が足りない . $z = s, w = t$ と置くと ,

$$x = \frac{-s + 2t}{5}, y = \frac{-7s - 11t}{5}$$

$$\begin{bmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -1/5 \\ -7/5 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix} s + \begin{bmatrix} 2/5 \\ -11/5 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} t$$

教科書の解答と合わせるのであれば , $s = -5s', t = -5t'$ とする .

$$\begin{bmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 \\ 7 \\ -5 \\ 0 \end{bmatrix} s' + \begin{bmatrix} -2 \\ 11 \\ 0 \\ -5 \end{bmatrix} t'$$

4.5 計量線形空間

内積の性質

内積の公理 :

(a) 線形性 $(c_1 \mathbf{x}_1 + c_2 \mathbf{x}_2, \mathbf{y}) = c_1(\mathbf{x}_1, \mathbf{y}) + c_2(\mathbf{x}_2, \mathbf{y})$

(b) 対称性 $(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = (\mathbf{y}, \mathbf{x})$

(c) 正値性 $(x, x) \geq 0$, 0 は $x = 0$ のときに限る

公理は内積という演算の満たす性質を規程するだけ.

具体的には, この性質を満たせば, どのように定義してもよい.

通常, 「物理的性質を上手に表現するように」決める.

「公理」とは: 前提として仮定するいくつかの事柄

「定理」とは: 複数の公理から論理的, 数学的に導出される命題

「命題」とは: 真か偽のどちらか (真理値) を決定しうる文

計量線形空間: 内積が定義された線形空間のこと.

自分自身との内積でベクトルのノルム (長さ) を定義する.

$$\|x\|^2 = (x, x)$$

したがって自分自身との内積は正になるよう内積を定義する. 複素数の場合.

$$\text{例: } a = \begin{bmatrix} 1 \\ i \end{bmatrix}, b = \begin{bmatrix} 1 \\ 2i \end{bmatrix}$$

$$\|a\|^2 = (a, a) = a^T a = 1 - 1 = 0$$

というのはおかしいので,

$$\|a\|^2 = (a, a) = a^T \bar{a} = 1 + 1 = 2$$

と一方の要素を複素共役をとり定義する.

$$(a, b) = a^T \bar{b} = \begin{bmatrix} 1 & i \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 \\ -2i \end{bmatrix} = 1 + 2 = 3$$

$$(b, a) = b^T \bar{a} = \begin{bmatrix} 1 & 2i \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 \\ -i \end{bmatrix} = 1 + 2 = 3$$

この場合は内積が実数値だったので $(a, b) = (b, a)$ が成り立っている.

正規直交基底

$$e_i \cdot e_j = \begin{cases} 1 & (i = j) \\ 0 & (i \neq j) \end{cases}$$

どの基底ベクトルも長さが1で, どの基底ベクトル同士も互いに直交している.

とてもよい性質がある.

$$v \cdot e_1 = (ae_1 + be_2, e_1) = (ae_1, e_1) + (be_2, e_1) = a(e_1, e_1) + b(e_2, e_1) = a$$

ふつうの平面座標でも, 正規直交基底のとり方は無数にある.